

「マリー・アントワネット展」に向けての事前学習

生涯

幼少期・結婚まで



少女時代のアントーニア

1755年11月2日、[神聖ローマ皇帝フランツ1世](#)と[オーストリア女大公マリア・テレジア](#)の十一女として[ウィーン](#)で誕生した。[イタリア語](#)やダンス、作曲家[グルック](#)のもとで身に付けた[ハープ](#)や[クラヴサン](#)などの演奏を得意とした。3歳年上の[マリア・カロリーナ](#)が嫁ぐまでは同じ部屋で養育され、姉妹は非常に仲が良かった。オーストリア宮廷は非常に家庭的で、幼い頃から家族揃って狩りに出かけたり、家族でバレエやオペラを観覧した。また幼い頃からバレエやオペラを皇女らが演じている。

当時のオーストリアは、[プロイセン](#)の脅威から伝統的な外交関係を転換してフランスとの同盟関係を深めようとしており([外交革命](#))、その一環として母[マリア・テレジア](#)は、自分の娘とフランス国王[ルイ15世](#)の孫ルイ・オーギュスト(後の[ルイ16世](#))との政略結婚を画策した。当初は[マリア・カロリーナ](#)がその候補であったが、ナポリ王と婚約していたすぐ上の姉[マリア・ヨーゼファ](#)が1767年、結婚直前に急死したため、翌1768年に急遽マリア・カロリーナがナポリのフェルディナンド4世へ嫁ぐことになった。そのため、アントーニアがフランスとの政略結婚候補に繰り上がった。

[1765年](#)にルイ・フェルディナンが死去した。[1769年](#)6月、ようやくルイ15世からマリア・テレジアへ婚約文書が送られた。このときアントーニアはまだ[フランス語](#)が修得できていなかったため、[オルレアン](#)司教であるヴェルモン神父について本格的に学習を開始することとなった。[1770年5月16日](#)、マリア・アントーニアが14歳のとき、王太子となっていたルイとの結婚式が[ヴェルサイユ宮殿](#)にて挙行され、アントーニアはフランス王太子妃

マリー・アントワネットと呼ばれることとなった。このとき『マリー・アントワネットの讃歌』が作られ、盛大に祝福された。

宮廷生活

デュ・バリー夫人との対立



婚姻の儀式の様子

結婚すると間もなく、ルイ 15 世の寵姫 [デュ・バリー夫人](#) と対立する。もともとデュ・バリー夫人と対立していた、ルイ 15 世の娘 [アデライード](#) が率いる [ヴィクトワール](#)、[ソフィー](#) らに焚きつけられたのだが、娼婦や愛妾が嫌いな母・マリア・テレジアの影響を受けたアントワネットは、デュ・バリー夫人の出自の悪さや存在を憎み、徹底的に宮廷内で無視し続けた。当時のしきたりにより、デュ・バリー夫人からアントワネットに声をかけることは禁止されていた。宮廷内はアントワネット派とデュ・バリー夫人派に別れ、アントワネットがいつデュ・バリー夫人に話しかけるかの話題で持ちきりであったと伝えられている^{[1][2]}



1769 年の肖像画

ルイ 15 世はこの対立に激怒し、母マリア・テレジアからも対立をやめるよう忠告を受けたアントワネットは、[1771 年](#) 7 月に貴婦人たちの集まりでデュ・バリー夫人に声をかけることになった。しかし、声をかける寸前にアデライード王女が突如アントワネットの前に走り出て「さあ時間でございます! ヴィクトワールの部屋に行って、国王陛下を御待ちまし

よう！」と言い放ち、皆が唾然とする中で、アントワネットを引っ張って退場したと言われている。

2人の対決は [1772年](#) 1月1日に、新年の挨拶に訪れたデュ・バリール夫人に対し、あらかじめ用意された筋書きどおりに「本日のベルサイユは大層な人出です」とアントワネットが声をかけることで表向きは終結した。その後、アントワネットはアデライード王女らとは距離を置くようになった。

結婚生活



王と王妃の結婚を祝うメダル

マリー・アントワネットとルイとの夫婦仲は、極めて良かったと言われる。鍵遊びをよく一緒にしたらしい。新婚生活は[ラ・ミュエツ宮殿](#)([フランス語版](#)) (現在の[パリ 16 区ラ・ミュエツ地区](#)([フランス語版](#)))でも送ったが、子供が生まれず性生活を疑った母親[マリア・テレジア](#)より、1777年4月、マリー・アントワネットの長兄[ヨーゼフ 2 世](#)がこの地の新婚夫妻の元に遣わされ、夫妻それぞれの相談に応じた。翌1778年、結婚生活7年目にして待望の子供[マリー・テレーズ・シャルロット](#)が生まれた。



乗馬服のアントワネット。(1771年、ヨセフ・クランツィンガー画)

母マリア・テレジアは娘の身を案じ、度々手紙を送って戒めていたが、効果は無かった(この往復書簡は現存し、オーストリア国立公文書館に所蔵されている)。時にパリの[オペラ座](#)で[仮面舞踏会](#)に遊び、また[賭博](#)にも狂的に熱中したと言われる。だが賭博に関しては子供が生まれた事をきっかけに訪れた心境の変化からピットリと止めている。

但し、ただの向こう見ずな浪費家でしかないように語られる反面、自らのために城を建築したりもせず、宮廷内で貧困にある者のためのカンパを募ったり、子供らにおもちゃを我慢させることなどもしていた。母親としては良い母親であったようで、元々[ポンパドゥール夫人](#)のために建てられるも、完成直後に当人が死んで無人だった[プチ・トリアノン宮殿](#)を与えられてからは、そこに家畜用の庭を増設し、子供を育てながら家畜を眺める生活を送っていたという。

フランス王妃として



王妃となったアントワネット
(1775年)



[1774年](#)、ルイ16世の即位によりフランス王妃となった。王妃になったアントワネットは、朝の接見を簡素化させたり、全王族の食事風景を公開することや、王妃に直接物を渡してはならないなどのベルサイユの習慣や儀式を廃止・緩和させた。しかし、誰が王妃に下着を渡すかでもめたり、廷臣の地位によって便器の形が違ったりすることが一種の

ステータスであった宮廷内の人々にとっては、アントワネットが彼らが無駄だと知りながらも今まで大切にしてきた特権を奪う形になり、逆に反感を買った。

こうした中で、マリー・アントワネットとスウェーデンの貴族アクセル・フォン・フェルゼン伯爵との浮き名が、宮廷では専らの噂となった。地味な人物である夫のルイ 16 世を見下している所もあったという。ただしこれは彼女だけではなく大勢の貴族達の間にもそのような傾向は見られたらしい。一方、彼女は大貴族達を無視し、彼女の寵に加われなかった貴族達は、彼女とその寵臣をこぞって非難した。

彼らは宮廷を去ったアデライード王女や宮廷を追われたデュ・バリ夫人の居城にしばしば集まっていた。ヴェルサイユ以外の場所、特にパリではアントワネットへの中傷がひどかったという。多くは流言飛語の類だったが、結果的にこれらの中傷がパリの民衆の憎悪をかき立てることとなった。

1785 年にはマリー・アントワネットの名を騙った詐欺師集団による、ブルボン王朝末期を象徴するスキャンダルである首飾り事件が発生する。このように彼女に関する騒動は絶えなかった。

フランス革命



「[首飾り事件](#)」の元となったダイヤの首飾り。金 500 kg 相当の価値があった



脱出時の王妃(1791年) 逃亡の慌ただしさの中で描かれ、顔以外は彩色されず未完成である



幽閉中の王妃

[1789年](#) 7月14日、フランスでは王政に対する民衆の不満が爆発し、[革命](#)が勃発した。[ポリニャック公爵夫人](#)(伯爵夫人から昇格)ら、それまでマリー・アントワネットから多大な恩恵を受けていた貴族たちは彼女を見捨てた恰好で[国外に亡命](#)してしまう。彼女に最後まで誠実だったのは、王妹[エリザベート](#)と[ランバル公妃](#)だけであった。国王一家は[ヴェルサイユ宮殿](#)からパリの[テュイルリー宮殿](#)に身柄を移されたが、そこでマリー・アントワネットはフェルセンの力を借り、フランスを脱走してオーストリアにいる兄[レオポルト2世](#)に助けを求めようと計画する。

[1791年](#) 6月20日、計画は実行に移され、国王一家は庶民に化けてパリを脱出する。アントワネットも家庭教師に化けた。フェルセンは疑惑をそらすために国王とマリー・アントワネットは別々に行動することを勧めたが、マリー・アントワネットは家族全員が乗れる広くて豪華な(そして、足の遅い)ベルリン馬車に乗ることを主張して譲らず、結局ベルリン馬車が用意された。また馬車に、銀食器、衣装筆筒、食料品など日用品や咽喉がすぐ乾く国王のために酒蔵一つ分のワインが積みこまれた。このため元々足の遅い馬車の進行速度を更に遅らせてしまい、逃亡計画を大いに狂わせてしまうこととなった。結局、国境近くのヴァレンヌで身元が発覚し、6月25日にパリへ連れ戻される。この[ヴァレンヌ事件](#)により、国王一家は親国王派の国民からも見離されてしまう。

[1792年](#)、[フランス革命戦争](#)が勃発すると、マリー・アントワネットが敵軍にフランス軍の作戦を漏らしているとの噂が立った。8月10日、パリ市民と義勇兵はテュイルリー宮殿を襲撃し、マリー・アントワネット、ルイ16世、[マリー・テレーズ](#)、[ルイ・シャルル](#)、エリザベート王女の国王一家は[タンブル塔](#)に幽閉される([8月10日事件](#))。

タンプル塔では、幽閉生活とはいえ家族でチェスを楽しんだり、楽器を演奏したり、子供の勉強を見るなど、束の間の家族団らんの時があった。10皿以上の夕食、30人のお針子を雇うなど待遇は決して悪くなかった。

革命裁判



ギロチン台へひきたてられるアントワネット

1793年1月、革命裁判は夫ルイ16世に死刑判決を下し、ギロチンによる斬首刑とした。7月3日、王位継承者のルイ17世と引き離される。タンプル塔の階下に移され、ルイ17世は後継人となったジャコバン派の靴屋であるアントワヌ・シモンをはじめとする革命急進派から虐待を受けた。

マリー・アントワネットは8月2日にコンシェルジュリー監獄に移送され、その後裁判が行われた。しかし、アントワネットは提示された罪状についてほぼ無罪を主張し、裁判は予想以上に難航。業を煮やした裁判所はジャック・ルネ・エペールやアナクサゴラス・ショーメット等にルイ17世の非公開尋問を行い「母親に性的行為を強要された」とアントワネットが息子に対して無理矢理に近親相姦を犯した旨を証言させた。しかし、アントワネットは裁判の傍聴席にいた全ての女性に自身の無実を主張し、大きな共感を呼んだ。



処刑前の王妃の様子スケッチ

しかし、この出来事も判決を覆すまでには至らず、[10月15日](#)に彼女は革命裁判で死刑判決を受け、翌 [10月16日](#)、[コンコルド広場](#)において夫の後を追ってギロチン送りに処せられることとなった。

処刑の前日、アントワネットはルイ16世の妹エリザベート宛ての遺書を書き残している。内容は「犯罪者にとって死刑は恥すべきものだが、無実の罪で断頭台に送られるなら恥すべきものではない」というものであった^[3]。この遺書は看守から後に革命の独裁者となる[ロベスピエール](#)に渡され、ロベスピエールはこれを自室の書類入れに眠らせてしまう。遺書は革命後に再び発見され、革命下を唯一生き延びた第一子のマリー・テレーズがこの文章を読むのは [1816年](#)まで待たなければならなかった。

ギロチン処刑



王妃マリー・アントワネットのギロチン処刑

遺書を書き終えた彼女は、朝食についての希望を部屋係から聞かれると「何もいりません。全て終わりました」と述べたと言われ、そして白衣に白い帽子を身に着けた。斬首日当日、マリー・アントワネットは特別な囚人として肥桶の荷車でギロチンへと引き立てられて行った。コンシェルジュリーを出たときから、髪を短く刈り取られ両手を後ろ手に縛られていた。19世紀スコットランドの歴史家アーチボルド・アリソンの著した『1789年のフランス革命勃発からブルボン王朝復古までのヨーロッパ史』などによれば、その最期の言葉は、[死刑執行人シャルル＝アンリ・サンソン](#)の足を踏んでしまった際に発した「ごめんなさいね、わざとではありませんのよ。Pardonnez-moi, monsieur. Je ne l'ai pas fait exprès ^[4]」だとされている。

通常はギロチンで処刑の際に顔を下に向けるが、マリー・アントワネットの時には顔をわざと上に向け、上から刃が落ちてくるのが見えるようにされたという噂が当時流れたとの説もある。

12時15分、ギロチンが下ろされ刑が執行された。処刑された彼女を見て群衆は「共和国万歳！」と叫び続けたという。

死後

遺体はまず集団墓地となっていたマドレーヌ墓地^{[[注釈 1](#)]}に葬られた。後に**王政復古**が到来すると、新しく国王となった**ルイ 18 世**は私有地となっていた旧墓地^{[[注釈 2](#)]}を地権者から購入し、兄夫婦の遺体の搜索を命じた。その際、密かな王党派だった地権者が国王と王妃の遺体が埋葬された場所を植木で囲んでいたのが役に立った。発見されたマリー・アントワネットの亡骸はごく一部であったが、**1815 年 1 月 21 日**、歴代のフランス国王が眠る**サン＝ドニ大聖堂**に夫のルイ 16 世と共に改葬された。

評価



サン＝ドニ大聖堂の慰霊碑

マリー・アントワネットの名誉回復には、結局死後 30 年以上を要した。現在では、後述の「パンがなければ」の発言をはじめとする彼女に対する悪評は、そのほとんどが中傷やデマだということが判明している。



王妃の二枚の肖像。1778年(左)、1779年(右)

マリー・アントワネットに対するフランス国民の怒りは、むしろ革命が始まってからの方が大きかったと言われている。フランスの情報を実家であるオーストリア皇室などに流し、革命に対する手立てが取れない夫ルイ16世に代わって[反革命](#)の立場を取ったことが裏切り行為ととられた(外敵通牒)。

「パンがなければ…」の発言

詳細は[「ケーキを食べればいいじゃない」](#)を参照



1788年の肖像画

マリー・アントワネットは、フランス革命前に民衆が貧困と食料難に陥った際、「[パン](#)がなければお菓子を食えばいいじゃない」と発言したと紹介されることがある(ルイ16世の叔母である[ヴィクトワール王女](#)の発言とされることもある)。原文は、[仏](#): “Qu'ils mangent de la brioche”、直訳すると「彼らは[ブリオッシュ](#)を食べるように」となる。ブリオッシュは現代ではパンの一種の扱いであるが、かつては原料は小麦粉・塩・水・イーストだ

けのパン([フランスパン](#))でなく、バターと卵を使うことからお菓子の一種の扱いをされていたものである。お菓子ではなく[ケーキ](#)または[クロワッサン](#)と言ったという変形もある。なおフランスを代表するイメージであるクロワッサンやコーヒーを飲む習慣は、彼女がオーストリアから嫁いだ時にフランスに伝えられたと言われている。



1791年の肖像画

しかし、これはマリー・アントワネット自身の言葉ではないことが判明している^[6]。[ルソー](#)の『告白^[6]』(1766年頃執筆)の第6巻に、ワインを飲むためにパンを探したが見つけられないルソーが、家臣からの「農民にはパンがありません」との発言に対して「それならブリオッシュを食べればよい」とさる大公夫人が答えたことを思い出したとあり、この記事が有力な原典のひとつであるといわれている。庇護者で愛人でもあったヴァラン夫人とルソーが気まづくなり、マブリ家に家庭教師として出向いていた時代(1740年頃)のことという。

[アルフォンス・カー](#)(フランス語版)は、1843年に出版した『悪女たち』の中で、執筆の際にはこの発言は既にマリー・アントワネットのものとして流布していたが、1760年出版のある本に「[トスカーナ大公国](#)の公爵夫人」のものとして紹介されている、と書かれている。実際はこれは彼女を妬んだ他の貴族達の作り話で、彼女自身は飢饉の際に子供の宮廷費を削って寄付したり、他の貴族達から寄付金を集めるなど、国民を大事に思うとても心優しい人物であったとされる。トスカーナは1760年当時、マリー・アントワネットの父である[神聖ローマ皇帝フランツ1世](#)が所有しており、その後もハプスブルク家に受け継がれたことから、こじつけの理由の一端になった、ともされる。

人物

音楽

[スピネット](#)を弾くマリー・アントワネット



ハープを奏でる王妃(1777年)

上記の通りウィーン時代に[グルック](#)らから音楽を教わっていた。また彼女が7歳だった[1762年](#)9月、各国での演奏旅行の途上、[シェーンブルン宮殿](#)での[マリア・テレジア](#)を前にした御前演奏に招かれた[モーツァルト](#)(当時6歳)からプロポーズされたという音楽史上よく知られたエピソードも持つ。

後年、ルイ16世の元に嫁いでもからも[ハープ](#)を愛奏していたという。タンプル塔へ幽閉された際もハープが持ち込まれた。歌劇のあり方などをめぐるオペラ改革の折にはグルックを擁護し、彼のオペラのパリ上演の後援もしている。

なおマリー・アントワネットは作曲もし、少なくとも12曲の歌曲が現存している。彼女の作品の多くは[フランス革命](#)時に焼き捨てられ、ごく一部が[パリ国立図書館](#)に収蔵されているのみである。近年では“*C'est mon ami*”(それは私の恋人)などの歌曲がCDで知られるようになった。

[2005年](#)には漫画『[ベルサイユのばら](#)』の作者でソプラノ歌手の[池田理代子](#)が、世界初録音9曲を含む12曲を歌ったCD「ヴェルサイユの調べ〜マリー・アントワネットが書いた12

の歌」をマリー・アントワネットの誕生日である [11月2日](#) に発売し、この曲が 2006 年上演の [宝塚歌劇『ベルサイユのばら』](#) で使用された。

このマリー・アントワネットの曲集は日本で世界初の楽譜 [\[7\]](#) も出版された。

入浴・香水

マリー・アントワネットが幼少期を過ごしたオーストリアには当時から [入浴](#) の習慣があった。母マリア・テレジアも幼い頃から彼女に入浴好きになるよう教育している。入浴の習慣がなかったフランスへ嫁いだ後も彼女は入浴の習慣を続け、幽閉されたタンプル塔にも浴槽が持ち込まれたという記録がある。

入浴をする習慣は、体臭を消すという目的が主だった [香水](#) に大きな影響をもたらした。マリー・アントワネットは当時のヨーロッパ貴族が愛用していた [ムスク](#) や動物系香料を混ぜた非常に濃厚な東洋風の香りよりも、[バラ](#) や [スマレ](#) の花や [ハーブ](#) などの植物系香料から作られる軽やかな香りの現代の香水に近い物を愛用し、これがやがて貴族達の間でも流行するようになった。もちろん、このお気に入りの香水もタンプル塔へ持ち込まれている。

家具

家具に非常に興味を持っており、世界中から沢山の木材を取り寄せた。[マホガニー](#)、[黒檀](#)、[紫檀](#)、ブラジル産 [ローズウッド](#) などを使い家具を作らせた。[珊瑚](#) や [銀](#) も家具の装飾用として使われた。ドイツ人家具職人を多く抱えルイ 16 世様式の家具を多く貴族に広めている。また日本製や中国製の家具や [漆工芸品](#) をとても好んでおり、マリア・テレジアからも贈られている。これらは現在も [ルーブル美術館](#) に展示されている。

ファッション・リーダー

当時の貴族女性は、相手が驚くようなヘア・スタイルを競っていた [\[8\]](#)。アントワネットも王妃になってまもなく、[ローズ・ベルタン](#) ([英語版](#)) という新進ファッション・デザイナーを重用する。ベルタンのデザインするドレスや髪型、宝石はフランス宮廷だけでなく、スペインやポルトガル、ロシアの上流階級の女性たちにも流行し、アントワネットはヨーロッパのファッションリーダーとなっていった。

何より女性達の視線を集めたのがその髪型で、当初は顔の 1.5 倍の高さだった盛り髪スタイルは徐々にエスカレートし、飾りも草木を着けた“庭ヘア”や船の模型を載せた“船盛りヘア”など、とにかく革新的なスタイルで周囲の目を惹きつけた。

即位後最初の数年間を過ぎてからは、簡素なデザインのを好むようになった^[9]。

この頃ベルタンはアントワネットのために袖や長い裳裾を取り払った[スリップドレス](#)をデザインしている。

容姿

身長は 154cm。^[要出典] 裁縫師のエロフ夫人の日記によると、ウエストは 58～59cm、バストが 109cm で、当時のモードに合った体型であった^[10]。

顔は瓜実顔で額が広すぎ、鼻は少し鷲鼻気味で、顎がぼってりし、『[ハプスブルク家の下唇](#)』と言われる特徴があった。しかし、輝くばかりの真珠のような白い肌と、眩い金髪を持つ魅力的な容姿であった。

教育係であったド・ヴェルモン神父は、「もっと整った美しさの容姿を見つけ出すことはできるが、もっとこころよい容姿を見つけ出すことはできない」、王妃の小姓であったド・ティリー男爵は、「美しくはないが、すべての性格の人々をとらえる眼をしている」「肌はすばらしく、肩と頸もすばらしかった。これほど美しい腕や手は、その後二度とみたことがない」、王妃の御用画家であった[ルブラン夫人](#)は、「顔つきは整っていなかったが、肌は輝かんばかりで、すきとおって一点の曇りもなかった。思い通りの効果を出す絵の具が私にはなかった」と述べている^[11]。

身のこなしの優雅さでも知られ、前述のド・ティリー男爵は「彼女ほど典雅なお辞儀をする人はいなかった」、ルブラン夫人は「フランス中で一番りっぱに歩く婦人だった」と述べている^[12]。

ルブラン

生涯

画家ルイ・ヴィジェの娘として[パリ](#)で生まれ、親から最初の絵画教育を受けたが、当時の大家たちからの助言の方が彼女のためになった。彼女は 10 代前半ごろには、すでに職業として肖像画を描いていた。

1776 年に、画家で[画商](#)であるジャン＝バティスト＝ピエール・ルブランと結婚した。彼女は当時の貴族の多くを肖像画に描き、画家としての経歴を開花させた。[マリー・アントワネ](#)

ツトの肖像画を描くためヴェルサイユ宮殿に招かれた。王妃は大変喜び、向こう数年間ヴィジェールブランは王妃や子供達、王族や家族の肖像画を数多く依頼された。王妃とヴィジェールブランは画家と王妃を超えた友人関係を築いていたといわれる。

1781年にヴィジェールブランは夫と共にフランドル(現ベルギー)とオランダに旅に出た。フランドルの大家の作品がルブランを刺激し、新しい技法を試みさせた。その場所で、ルブランは後のオランダ王ヴィレム 1 世を含む、数名の貴族達の肖像画を描いた。

1783年3月31日、ヴィジェールブランはフランスの王立絵画彫刻アカデミーの会員に、歴史的寓意画家として迎えられた。ヴィジェールブランの入会は、夫が画商であることを理由にアカデミーを統括する男性達に反対されたが、結局、マリー・アントワネットが自分の画家の利益になるよう、夫のルイ 16 世に相当な圧力をかけたため、彼らの主張は国王の命令により覆された。同日に2名以上の女性の入会が認められたことで、女性と男性メンバーではなく、女性同士が比較されがちになった。

王族が逮捕された後、フランス革命の間ヴィジェールブランはフランスから逃れ、数年間をイタリア、オーストリア、ロシアで暮らし、画家として働いた。そこでは貴族の顧客との付き合いの経験がまだ役立った。ローマでは作品が大絶賛され、ローマの聖ルカ・アカデミーの会員に選ばれた。ロシアでは貴族から歓迎され、女帝エカチェリーナ 2 世の皇族を多数描いた。ロシア滞在中にヴィジェールブランはサンクトペテルブルク美術アカデミーの会員になった。

革命政府の転覆後の1802年、ヴィジェールブランはフランスへ戻った。ヨーロッパ上流階級からの引く手あまたの中、イギリスを訪れ、バイロンを含む数名のイギリス貴族の肖像画を描いた。ナポレオン・ボナパルトの妹の肖像画も手がけたが、ナポレオンとの折り合いが悪くなり、1807年に出国、スイスに赴いて、ジュネーヴ芸術促進協会(Société pour l'Avancement des Beaux-Arts de Genève、現在のジュネーブ芸術協会)^[1]の名誉会員になった。フランスが王政復古するとルイ 18 世に手厚く迎えられ、フランスを安住の地とした。

ヴィジェールブランは1835年と1837年に回想録を出版した。それはロイヤル・アカデミーが支配した時代の終わりにおける芸術家の育成について、興味深い視点を提供した。

その後もヴィジェールブランは、旺盛な創作活動を続けた。50代でイル＝ド＝フランス、イヴリーヌ県のルーヴシエンヌに家を購入し、1814年の戦争中にその家がプロイセン軍に押収されるまでそこに住んだ。その後彼女は、1842年3月30日に没するまでパリ、

サン・ラザール通り([fr](#)) 界隈に留まった。ヴィジェ＝ルブランの遺骸はルーヴシエンヌへ引取られ、住み慣れた家の近くの墓地に埋葬された。

エリザベート＝ルイズ・ヴィジェ＝ルブランの墓碑銘は“*Ici, enfin, je repose...*” (ここで、ついに、私は休みます…)であった。

ヴィジェ＝ルブランは 18 世紀の最も重要な女性芸術家だと考えられている。彼女は 660 の肖像画と 200 の風景画を残した。優雅な自画像もよく知られる。個人コレクションに加え、彼女の作品は[ロンドンのナショナルギャラリー](#)のような欧米の主要な美術館で見ることが出来る。

画家としては名声を博したが、夫は賭博好きであり、一人娘も長じてから素行が悪かったなど、家庭的には恵まれなかった。



1790 年に[フィレンツェ](#)で描かれた自画像。

(2017.1.31 資料作成 渡邊敏幸)